

## 「YMO」と「金属バットでホームラン！」

音楽家坂本龍一氏が先月亡くなった。氏の名を一躍有名にしたのがYMO（結成は1978年）。そのYMOは「機械（コンピュータ）に演奏させる」というコンセプトを格好いいと思うかどうか、好き嫌いの分かれ目だったと思うが、当時中学生だった私は、控え目に言って、YMOは苦手だった。（教授、ゴメンなさい。）

苦手だった理由は、子どもの頃に友だちが（木製バットではなく、）金属バットでホームラン級のヒットを打っても、素直に「スゴい」と感心できなかったのに近い。つまり、金属バットやコンピュータに対して、「ずるい」というやっかみの気持ちがあったからである。今では、金属バットは高校野球でも公式に使用が認められているし、コンピュータにいたってはこれなしには生活が全く成り立たない状況。それでも、「コンピュータはどこかうさんくさい」という感情が未だに残っているのには、我ながら驚いてしまう。（もちろん、そんなことを口にしようものなら、生徒や教職員から「ウチの校長、PCをうさんくさいって思ってるって、ヤバい、終ってる！」という悲鳴が聞こえそうですが。）

ところで、日本経済新聞社が主催する「星新一賞」はAIを創作に用いて応募できる文学賞であるが、名古屋大学大学院の佐藤理史教授はAIを使ったチームで小説を創作し、応募したとのこと。氏によると、コンピュータにとって文章は単なる数字の並び替えでしかなく、膨大な量のパターンを覚えているだけで、意味をもちろん理解しているわけではないそうである。また、「AIー茶くん」を生み出した北海道大学大学院の川村秀憲教授によると、人間なら例えば「恋」という言葉が入ってなくても、それが恋の句であると理解できるが、AIにはそれができない。人間が人生経験に照らし合わせて言葉を理解しているのに対し、AIは言葉に付随する経験や常識を持っていないからだそうである。何より、AIは人間の作品に「寸分違わない句」を無数に作ることはできても、その中から「優れた句」を自ら選び出すことはできないらしい。

AIが作る小説や俳句に感動するか、それとも「うさんくさい！」と受け止めるかどうかは、個人の考え方や感じ方によるものであろうが、少なくとも、コンピュータには得意とする分野とまだ発達途上にある分野があるのは間違いないようである。

さて、年を取ってもいいことなんか一つもありませんが、「コンピュータが苦手」と言っても少しは許してもらえそうな気がするのが、唯一の年寄りの特権かも知れません。（もしかしたら、全然許されていないかもしれませんが、せめて許されていると強く信じたいものです。）それでも、幼い頃、祖父に「マッサージ機じゃなく、孫の手が一番気持ちいい」と言われて、「人間の手も機械も全然変わらないじゃん」と心の中で言い返していたことを思えば、せめて、そんなわがままを言って、たまに遊びに来てくれた孫を困らせることだけは、決してしないでおこうと思う今日この頃です。（あっ、孫はまだいませんでした。悪しからず）

令和5年5月1日

大村城南高等学校長 中小路尚也